

中級の日本語学習者の作文における「だから」の指導

—— 「だから」の際立たせの機能 ——

齋藤 シゲミ

1. はじめに

日本語学習者の「書く」ことの指導では、初級の後半ぐらいからは、接続詞を用いて文と文をつないだ、まとまった文章を書かせる。そこでは理由述べや帰結を表わす「だから」が使われることが多い。「だから」は、母語話者での会話にも多く現われ、耳に親しみやすいことばであるが、論文では使われない。それは「だから」の機能に論文とは合わない面があるからである。木下（1981）は、理科系の文書の特徴として、「心情的要素を含まないこと」としているが、このことはすべての論文に当てはまるといえる。学術論文は、主観を排除した客観的事実に基づいた論理展開で書き進められていく。それに対して「だから」には、市川保子（2000）のいう「話し手の感情・主張を強くあらわす」機能や、比毛（1989）のいう「話し手である主体の論理的な考え方や態度、評価などが強く前面に押し出される。」機能があり主観性が強く、論文とはそぐわない。それ故、論文指導では「だから」は使わない、または、「したがって」に直すべき、という指導がなされる。

しかし、細川（2002）の言うように、第二言語習得の学習を、学習者自身の考えていることを引き出すことに重点がおかれると考え、日本語教育をコミュニケーションを目的とした自己発信表現型の言語教育と捉えるならば、「だから」の自分の心情（主観）を論理的に展開して伝えるという機能も、軽んじられるべきではない。

「だから」は書き手の心情を伝えるのに有効な表現である。「だから」には、自己主張がマイナスに出る面もあり、使用には注意が必要であるが、その面のみが強調されるあまり、論理展開上の有効性を生かした指導がなされていない。「だから」には「したがって」では言い表せない機能がある。学習者がその機能や運用について深く理解しないまま論文に進んで、その使用を止められてしまうと、自己表現の有効な方法を失う事になる。「だから」は、中級の学習者にも多用されるが、それらは単純な理由述べや帰結の繰り返しになって、単に自己主張性を強めていたり、本来は因果関係が明らかでなければならぬのに、それがあいまいになったりする齟齬を生んでいる。「だから」の持つ、書き手と結びついた論理展開を示す機能は、「だから」で導く文の重要性を際立たせ、その文が、書き手の強調したい帰結やまとめになっていることを示している。「だから」のこの機能についての理解を深めることで、「だから」と「したがって」の使い分けができ、さらには、論文における「したがって」の運用につながっていくと考える。

本稿では「だから」の機能とそれの中級の学習者への指導について考察した。「だから」

には、佐久間（2002）や岡本・多門（1998）に見られるように、談話では文章とは異なる機能もあるとおもわれるが、本稿は文章中の機能に限った。また、「だから」は、文のなかに使われることもあるが、本稿では、文と文の間に使われる場合に限った。

2. 先行研究

市川孝（1978）は接続詞については、「二つの表現の中間に位置して、両者を対立させ、その関係を示すことによって、二つの表現を接続する働きを持っている。」と定義づけている。本稿では、「だから」の機能についての考察を文と文との間に使われる場合に限ったが、市川孝は文の接続関係について、八種類の類型（一）順接型（二）逆説型（三）添加型（四）対比型（五）転換型（六）同列型（七）補足型（八）連鎖型を示し、（一）順接型—前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる、の下位分類に、〔順当〕〔きっかけ〕〔結果〕〔目的〕をあげ、その中の〔順当〕に「だから」を位置付けた。さらに、八種類の型の上位分類として、（一）順接型・（二）逆説型を、論理的結合関係—二つのことから論理的に結び付けて述べる関係、に分類した。市川孝によれば、文の接続に関わる「だから」は、論理的結合関係を示し、前の内容を条件とした帰結がその後続くことになる。また市川孝は、接続詞が、前後の表現のどの範囲を関係づけるかは文脈によるとし、直前の一文だけではなく、連文や一段落あるいは数段落全体の内容を受けるものもあるとしている。

佐久間（2002）は、文連鎖についての考察で、接続詞について市川孝の「接続詞の基本的な用法」¹の「二つの文の間に用いる。」用法を対象として考察している。そこでは、「本章の接続詞の規定概念は市川説に従うが、文章・談話における文連鎖の解明には、市川の接続語句よりもさらに広い接続表現という新たな概念を導入することにする。」とし、接続表現の範囲を、「接続詞相当の働きをする副詞や名詞、連語、句・節・文・段レベルの表現まで」とした。佐久間は、その文脈展開機能を市川孝の接続関係と対応させる形で3類12種に分類した。

A. 話題開始機能 a 1. 話を始める機能 a 2. 話を再び始める機能 B. 話題継続機能
b 1. 話を重ねる機能 b 2. 話を深める機能 b 3. 話を進める機能 b 4. 話をうながす機能
b 5. 話を戻す機能 b 6. 話をはさむ機能 b 7. 話をそらす機能 b 8. 話をさえぎる機能
b 9. 話を変える機能 b 10. 話をまとめる機能 C. 話題終了機能 c 1. 話を終える機能
c 2. 話を一応終える機能

その中で市川孝のいう順接型が対応しているのが b 3・b 4・b 6・b 10・c 1・c 2 である。その代表的な例として「だから」が上がっているのが、b 4・b 6・c 2 である。「したがって」は、b 10 の例として上がっている。

筆者は、ここでは、「だから」の c 2. 話を一応終える機能 に注目したい。これは、市川孝が「直前の一文だけではなく、連文や一段落あるいは数段落全体の内容を受けるもの

もある」と指摘した機能と関連し、それまでをまとめながら終えている機能と考えられる。

森田 (1987) は「文の集合における相互の接続関係はあくまで個々の文の“意味上の問題”である。」として、「文脈上の意味場の展開」を問題にした。森田によれば、「文の接続は、先行文によって生み出された文脈上の意味場を受け継ぐ形で後続文が創造され接続していく」ことになる。この意味場の観点から接続詞・接続語を2類4種に分類している。(1) 新たな意味場を作る接続詞 (2) 文脈の意味場に従う接続詞 ア. 意味場の中での展開 イ. 意味場に付加する展開 ウ. 意味場に対する展開

森田は、「だから」を断定の助動詞を含む接続詞とし、先行叙述の陳述性を「だ」によって代行させて意味場を受け継いでいっているとしている。断定の助動詞「だ」は「先行文の生み出す意味場を間接的に表わしている。」のである。ア. 意味場の中での展開 では、「先行叙述内の事柄ないしは叙述内容を受ける展開であるから、コソ系の指示語を伴う語例が多い。意味場内の展開であるから、断定の助動詞を含む接続詞は現われない。」(点は森田)とし、ウ. 意味場に対する展開 では、「先行叙述そのものを取り立てて、その意味場に対して結果や原因・理由などを示す展開であるから、指示語も断定の助動詞も含まれやすい。」として、「だから」をウ. 意味場に対する展開に分類している。森田によると「だから」は先行叙述そのものを取り立てて次の意味場に展開していくことになる。

比毛は、「主として文をむすびつけるばあいの接続詞を研究の対象にすえて、接続詞と呼ばれるものが段落の中でどのような働きをしているか」について考察し、市川孝と同様に「だから」を論理的な関係に位置付けている。ここで比毛は「だから」と「したがって」を「主体の論理」と「客体の論理」という奥田 (1986) の用語によって対比させ、「どちらの接続詞を使うかによって、ふたつの出来事のあいだの関係づけかた、より正確には「論理の立て方」が違ってくると述べている。比毛は「だから」について、「「だから」は文のなかにさしだされた、それぞれの対象的な内容を話し手である「わたし」の立場から「主体の論理」によって関係づけるはたらきをする接続詞である。」とし、「したがって」については、「話し手は、まえの文にさしだされた対象的な内容から「対象の論理」によって客観的にみちびきだされる必然的な関係として、次の文における事態を説明する。」としている。比毛 (1987) はまた、「それで」との比較において、「接続詞の「だから」は、「それで」のばあいとは対照的にはなし手の主観的な態度がはっきりと表現される。」として「だから」の主観的な面を上げている。

筆者は、以上の先行研究は、相反するものではなく、「だから」の機能をそれぞれの観点から捉えたものだと考える。市川孝によれば、「だから」は、論理的結合関係を示し、前の内容を条件とした帰結がその後続くことになるが、森田の言うように、単に続いているのではなく、先行叙述そのものを次の意味場に展開していくのであり、その結果、論理展開の要点は、「だから」以降の文に移っていくことになる。また、比毛によればその帰結は、「わたし」が「わたしの論理」でみちびきだしたものになる。筆者は、「だから」

の機能にはまず、その前を受けてそれに対する「だから」のあとの文を導く機能、つまり、「だから」以降を、論理展開の上でその要点を引き継いでいるという意味で際立たせる機能があり、同時に、それには「わたし」の立場が付き纏い、書き手の論理の主張である面を伴っていると考える。

市川孝は、接続詞が直前の一文だけではなく連文や一段落あるいは数段落全体の内容を受け取るものもあると指摘するが、「だから」もそうであり、「だから」には帰結が単にすぐ前だけを受けたものだけではなく、それまでの長い展開全体を受けているときがある。それは、佐久間の「話を一応終える機能」につながるが、それまでの展開をまとめた帰結は、比毛がいうように「わたし」の立場から関係づけられ」ている。したがって、筆者は、「だから」はそれまでのまとめを示すと同時に、そのまとめは、書き手が主体的に強調したいものであるということも示していると考ええる。

「だから」の書き手の主体性を強調する機能は、「わたし」の理由付けや正当化にも用いられることになる。論理的帰結という面からは、「だから」は「したがって」にも「それで」にも変えられるときもあるが、「だから」には、作者の自己主張的な面が現われてくると考えられる。それが強調される時、「だから」は、「したがって」や「それで」には変えることができない。

以上のことから、本稿では科学的な読み物にあたる説明文、ジャーナリストの取材を基とした記事ではなく、何らかの専門を持った書き手による論説文、および、新聞三社（朝日・読売・毎日）の2004年8月・9月の社説を資料とし、「だから」の説明文、および論説文中の機能について考察した。

3. 「だから」の機能

3-1. 「だから」の後が書き手の正当性の主張であることを際立たせる機能

- a. ①来年で創立二十年となり、これまで約五百人の子供たちと接してきた。②当教室は、いわゆる「お受験塾」ではない。だから、③学校別の受験対策よりも、個々の子どもが持っている資質をいかに伸ばすか、に腐心してきたつもりである。（正司昌子「幼児が変だ！」『文芸春秋』2004 5月号）（下線と番号は筆者）
 - b. 小説を書くこと以上に充実感があることは、わたしの人生にない。だから私はデビューから四半世紀の間、小説を書き続けているのだ。（村上龍「22歳のフリーター諸君へ」『文芸春秋』2004 5月号）
 - c. マイクを突きつけられ「天国の〇〇さんに一言」って言われるのが、不愉快でたまらない。
だから仲良くしていただいた三波春雄さんのときも、この間の水上勉さんにしても、お葬式に行っていません。（永六輔「だからぼくは葬式に行かない」『文芸春秋』2004 5月号）
- aの③の文は、②の文の帰結であるが、②の文は③の文を示すために、用意された理由付けである。具体的な内容は③の文にある。「だから」は、単なる帰結ではなく、「つもり」

という意志を表わすことばと呼応して、書き手の正当性の主張を示していると考えられる。

bとcは、「だから」の前の文は前置きではない。だが、「だから」に導かれている文は、aと同じくそれぞれ書き手の行動についての正当性を主張している。

「だから」が、書き手の行動の理由を述べるのに使われる場合、しばしば書き手の意志と関係することばをとめない、「だから」以降が、その個人の正当性の主張であることを示す。これらの「だから」は、帰結を表わしてはいるが、「したがって」や「それで」に変えることはできない。

3-2. 「だから」の後が書き手の論理による帰結であることを際立たせる機能

d. ①どの国の銀行を見ても、企業向け貸し出しで儲かるのは中小企業でしかない。②なぜなら、中小企業は銀行よりも信用力が低いからだ。したがって、③銀行よりも高い金利でしかお金を集めることができない。だから、④銀行のお客様といえば、中小企業に決まっている。⑤その大事なお客様である中小企業を無視したビジネスモデルが銀行業において成り立つわけがない。(木村剛「メガバンクは消滅するか。」「文芸春秋」2004 2月)(下線と番号は筆者)

dの「したがって」は、③の文が、②の文の帰結であることを表わしている。「だから」は、④の文が、②の文と③の文を合わせて理由とした帰結であることを示している。④の文の、「お客様は中小企業」という帰結は、①の文の「貸し出しで儲かるのは中小企業」という内容と重複する。④の文は、①の文をもう一度確認して強調していると考えられる。

論理展開上から言えば、「したがって」でも、「だから」でも同じであるが、⑤の文の「成り立つわけがない。」という、主張性の高い表現との均衡を考えるなら、④の文のまゝに「だから」を用いたのは、当然である。「したがって」は、②の文から③の文が当然の帰結として導き出されたことを示し、「だから」は、書き手の重点が「だから」の後の④の文にあることを示している。書かれていることが、如何に論理にあったものかを示したいときには、「したがって」を使い、自分の主張になくてはならないことを印象付けるには、「だから」を使って際立たせていると考えられる。「だから」は、その後の文が、それまでの展開を受けて、書き手の主張性を持った帰結であることを際立たせている。

e. ①強い精神力の根っこには昨年の悔しい体験もあったろう。②初戦で8対0とリードしながら降雨でノーゲームになり、翌日の試合は勝利の女神に見放された。③何点リードしても安心できない。だから、④1点でももぎ取ろうとする。⑤そういう積極的な姿勢が栄冠を引き寄せたといっている。(8, 23 朝日)(下線と番号は筆者)

eの④の文は、②の文と③の文を合わせて受けた帰結である。「だから」はそれを示している。④の文は、「そういう」という指示語で引き継がれて、⑤の文を形成していく。④の文は、意志をあらわす意向形が用いられている。また、①の文にも予想を表わす「う」

があり、⑤の文にも「いっていい」という判断を表わす表現がある。これらの表現と、客観性を重んじる「したがって」の表現は、そぐわない。④の文は、⑤の文の「栄冠を引き寄せた」要因であり、この文が論理展開の要ともいえる。「だから」は、書き手の論理からの帰結であり、他の部分よりも論理展開上重要であることを際立たせているといえる。

f. ①中国は脱北者を難民とは認定せず、「不法入国者」として扱っている。だから、②目にあまれば、見せしめに強制送還したり、支援者を拘束してきた。しかし、③国際社会での地位を高めたいだけに辛い立場にある。④事態をもてあましていないか。

⑤ここは思案のしどころだ。(9, 6 朝日) (下線と番号は筆者)

f'. ①中国は脱北者を難民とは認定せず、「不法入国者」として扱っているから目にあまれば、見せしめに強制送還したり、支援者を拘束してきた。しかし、②国際社会での地位を高めたいだけに辛い立場にある。③事態をもてあましていないか。(筆者作) (下線と番号は筆者)

f'は、fを「から」で一文にしたものである。fもf'も共に、前項(前文)に、理由・原因を述べ、後項(後文)に、その帰結を述べている。fでは、「だから」は、①の文と②の文が、原因と帰結という論理関係で結ばれていることを示すが、森田の言うように、①の文の意味場を受け継いで②の文が想像されており、②の文が出てきた時点で、論理展開の重要性は①の文から②の文に移っていると考えられる。②の文から③の文への展開も論理関係の意味は異なるが、同じ展開だといえる。①の文を受け継いで②の文ができ、②の文を受け継いで③の文がでてくるという展開の中で、②の文の中の「強制送還」「支援者の拘束」ということが③の文のなかの「辛い立場」の原因になっているというニュアンスがはっきり伝わる。しかし、f'では、①の文の前項と後項は原因理由と帰結が一つになってまとまっている。そのため、②の文との対応がはっきりせず、「辛い立場」の原因がなんであるかが明確ではない。「だから」には、前文を受けて「だから」以降の文の論理展開上の重みを際立たせる機能があると考えられる。

「したがって」にも同様の機能がある。fの①と②と③の文にはeのように、意志や予想や判断を表わす表現はない。だが、③の文から受け継がれている④の文、さらには⑤の文に含まれる「ではないか」「思案のしどころだ。」という書き手の意志と大きく関わってくる表現には、「したがって」にするとつながりにくなる。この「だから」も、その後の文の書き手にとっての重要性を際立たせているといえる。

3-3. 「だから」の後の文を、書き手の論理によってそれまでをまとめたものとして際立たせる機能。

g. ①そもそも今日の日本人は、社会化を遂げるのに過去とは比較にならないほどの年月を要するようになっていく。

②百年も前であれば、十代半ばで成人とみなされた。③それに見合う行動倫理と規範を修得していた。

④二十一世紀には、ほぼ匹敵するまでの成長に、およそ倍の時間を要するのではないだろうか。
だから、⑤全く社会性が未熟なままでケータイを持ち、同類のものだけで構成される一つの完結した交流の世界を終日にわたり持つことを許されるのである。(正高信男 2004「人間性の進化史」
『NHK 人間講座 2004, 12～1 月期』) (下線と番号は筆者)

①～④の文は、⑤の文の「社会性が未熟」という部分にだけ関与している。⑤の文のそれ以外の内容は、「だから」の前の段²にあたる部分のほかの部分を受けてまとめたものである。⑤の文の内容については、「ケータイメールの普及は、…中略…眠りにつくまでのあいだ、好みの者同士で自由にメッセージを交わすことができる」というまとまりをなす文の集合と、「だが、今はちがう。…中略…その縦割りの枠がなくなってしまったのである。」というまとまりをなす文の集合とがその前に展開されている。⑤の文は、段にあたる部分全体を引き継いだ帰結になっている。「だから」は、それまでの段にあたる部分をまとめていることを際立たせている。「したがって」はその客観的な論理性から行って、三段論法の関係を示すことが多い(比毛)が、かなり長い部分の展開をまとめて受け継ぐことは難しいと考える。論理展開が長ければ長いほど、あいまいな部分が入り込む余地は大きい。佐久間は、「したがって」をB. 話題継続機能の b 10. 話をまとめる機能に入れ、「だから」をC. 話題終了機能の c 2. 話を一応終える機能に入れている。g の「だから」は、話題継続機能というより、話題終了機能にちかい。この著作では、これらの段や文はある小見出しがつけられたまとまりの中にあるが、そのまとまりはこの④の文で終わっている。「だから」は、書き手の論理によってそれまでをまとめたものとして際立たせて終わらせているといえる。

4. これまでの「だから」の指導と、学習者の使用

入門時の「書く」ことの学習は、文型・語彙等の制約が大きく、指導は、短文作成やモデル文の部分的な入れ換え程度が多い³。「わたしのいちにち」「わたしのへや」⁴などの課題による学習者の作文は、短文の羅列になりがちである。それに対して、門脇(1999)は初級学習者の自由作文にまとまりがないのは、談話展開⁵が意識されていないからだとし、初級段階からの、談話展開の指導の必要性を主張している。

細川は言語学習は当初から具体的な目的をもった総合的な活動であるべきだとしているが、門脇のいう談話展開も具体的な読み手とのコミュニケーションを意識したものである。談話展開のない作文練習は、コミュニケーションを意識しない、練習のための練習になってしまう。

門脇は談話構成を意識させた作文指導のテキスト⁶を作成しているが、そこではコメントや意見の項目が設けられ⁷、モデル文に、「ですから～と思います。」という文型を度々示している。これは、そういう配慮のないテキストに比べ、「書く」ことに、自分を表現できるという点で評価できると思われる。「ですから」は、「だから」の丁寧形で、原因・

理由を表わす接続詞として初級のテキスト⁸にも出てくる。門脇のテキストでは、「ですから」の前のユニットの展開をまとめる機能が主に使われているが、「と思います。」と共に起している点から見ても、この場合の「ですから」は書き手の主張をあらわしており、書き手の考えをまとめて、際立たせていると考えられる。

「ですから」は「だから」の丁寧形⁹と見られるが、中級学習者の作文にも、それまでの展開をまとめて、自分の主張として際立たせる機能の「だから」が多く使われている。

h. だから、中国は大学の図書館の施設をもっと、現代的に改革してほしい。(中国留学生 Y・K)

i. だから、キヨスクは多くの人にとって、便利な店です。(中国留学生 Y・K)

h も i も同じ学習者で、度々、作文の最後に、「だから」の帰結にあたる文を書いている。h は図書館についての i はキヨスクについての課題作文である。h は論理の展開が、「日本の図書館は、」「それに対して中国の図書館は」「もし中国の図書館が」という形で進められ、論理上の問題がない。一方、i は「中国のキヨスクはとても多い」で始まり、時間、買い物をする人、売っている物と紹介が続き、脈絡が切れたまま「だから」の帰結の文で終わり、帰結としてまとまる論理的必然性が乏しい。この「だから」には、説得性がなく、単に自分の主張を唐突に述べた文と捉えられてしまう。

j. 日本の大学と中国の大学は違う所が多い。だから、私はまだちょっとなれていないが、そのうちなれてくると思う。(中国留学生 C・K)

j の「だから」はそれまでの長い展開をまとめて受けているわけではなく、単純に前文を受けて後文の帰結になっている。しかしこの場合も、前文の「違う所がおおい」と後文の「なれていない」は、直接には結びつかず、後文を前文の帰結とするには無理がある。間に、「日本に来てから時間が短い」などの別の理由が必要である。

「だから」は、書き手の論理によることから、論理性が厳密さに欠ける面がある。あいまいな理由付けでも、「わたし」が思うことについては許容されてしまう。それ故論理的展開があいまいなまま用いられやすい。しかし、「だから」の機能は、論理的な展開を基にしており、そこを大きくはずしてしまうと、理由のない押し付けの自己主張になってしまう。まず論理的な帰結であることを確認したうえで、それが書き手の論理であることを理解させるべきである。

k. ①友達は私に誘って、一緒に開拓の村へ行った。②開拓の村へ行ったことがないから、行きたいだ。だから、③5月4日に開拓の村へいった。④私たちは朝8時に発足した。⑤でも、札幌市厚別区についた時、道を迷った。⑥みんなどうすればいいのがわからなかった。⑦その時、友達には交番に行って、お巡りさんに道を聞いた方がいいと言った。だから、⑧交番に行ってお巡りさんに道を聞いた。(中国留学生 C・Y) (下線と番号は筆者)

k の③の文は「だから」によって②の帰結であることが示されている。⑧の文も「だから」によって⑦の文の帰結であることを示されている。これらは前の文との因果関係ははっきりしている。にもかかわらず、③と④の文には押し付けがましい響きがともなう。

重なって出されているというだけでなく、本来は必要のない書き手の論理展開上の重要性を際立たせる機能が働いているからと考えられる。「だから」以降の文が、書き手にとって論理展開上重要である根拠はない。単に前文の結果である「それで」を使うべきである。「だから」について、原因・理由を表わす接続詞で、前の文を受けて、結果を表わす後の文へつなぐ働きをする、というだけの認識にとどまっていたため安易に用いられていると思われる。

「だから」のこの際立たせの機能は学習者のテキストには触れられておらず中級のテキスト¹⁰においても「だから」は「から」と同様に扱われている。

- l. この会社の人は英語がわからない。だから（英語がわからないから、）日本語で話さなければならない。（日本語中級 J301 5課 練習B）
- m. 日本へ来るときは持っているお金が少なくて親からお金をもらうこともできない。だからアルバイトをしなければならない。（中国留学生 S・H）

l は、テキストの例文である。l も m も「だから」に導かれる後文は、前文を原因・理由とする帰結である。それは、「から」によって一文にした場合と同じである。しかし、これらが実際に何らかの文章の中で使われた場合は、「から」で一文になった場合とは違って、後文に重きがおかれ、そこには書き手の論理による「なければならない」であらわされる必然性が示される。

5. 終わりに

筆者は、2002～2003年度の中級にあたる大学学部留学生（中国）10名の122編の作文における接続詞¹¹の使用を調査したが、そこでは「ですから」と「だから」が18%を占め、多用がみられた。

「だから」の原因・理由の帰結を示す機能は、自分の考えを説明するにあたっては、有効である。また、「だから」は書き手の論理によっていることから論理の厳密さを甘く考えられがちである。その為「だから」が安易に使われたと思われる。

安易な多用を防ぐためには、「だから」の「際立たせの機能」について認識させるべきである。「だから」には、その後の文を「書き手の正当性の主張」「書き手の論理による帰結」「書き手の論理によってそれまでをまとめたもの」として際立たせる機能がある。それを理解し「だから」を用いる必要性を吟味した上で用いないと、書き手の予想に反した齟齬を生み出してしまうことを理解させるべきである。中級の学習者の作文における論理展開での、「だから」や「だから」と「したがって」の使い分け¹²などについての指導を深め、より有効に、「だから」を運用させるべきと考える。

注

- 1 市川孝は、接続詞の用法として2種10類をあげている。(a) 接続詞の基本的な用法 ①二つの単語の間に用いる。②二つの文節の間に用いる。③二つの連文節の間に用いる。④二つの文の間に用いる。(b) 接続詞のやや特殊な場合の用法 ①後文の特定の部分を導く。②前文の特定の部分を受ける。③前の連文を受ける。④後の連文を導く。⑤前文を隔てて、その前の文を受ける。⑥会話(または地の文)をうけて、地の文(または会話)を導く。
- 2 市川孝(1978)の「文段とは、一般に、文章の内部の文集合(もしくは一文)が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である」による。
- 3 C&P日本語教育・教材研究会(1988)『日本語作文Ⅰ』による。
- 4 東京外国語大学留学生日本語センター(1999)『初級日本語作文練習帳』による。ここでは対応させている「初級日本語」の課による文型・語彙の制約がある。
- 5 門脇は「本稿では「談話展開」を「文章構成」の意味で使用している。」と述べている。
- 6 『みんなの日本語 やさしい作文』門脇薫 西馬薫(1999)スリーエーネットワーク
- 7 ユニット2の「わたしの部屋」の課題で、三つ目のフローチャートに、部屋についてのコメントという項目を設けている。
- 8 『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク編(1998)では17課の例文3に「…すみません。きょうは妻と約束があります。ですから、早く帰らなければなりません。」の形で出てくる。『文化初級日本語Ⅱ』文化外国語専門学校日本語課程(1987)では、37課に「ですから、ぜひ～とおもっています。」の形ででてくる。
- 9 比毛(1989)「今日ではデス、マス体のていねいな文章では男女のべつなく、一般に「ですから」の形が用いられる。」による。
- 10 『日本語中級J301—基礎から中級へ—』土岐哲・関正昭・平高史也・新内康子・鶴尾能子著(1995)の5課で「[だから]は、「ですから」の普通体で、話しことばで使います。両方とも、原因・理由を表わす接続詞で、前の文を受けて、結果を表わすうしろの文へつなぐはたらきをします。」という説明がなされている。
- 11 文と文の間に現われた、市川の区分による接続詞を対象とした。
- 12 『日本語の作文技術 中上級』倉八順子(2000)古今書院では、「だから：話しことばで、自分の意見を主張する場合に用いる。したがって：前後関係から理論的に結論を導く場合に用いられる。」という説明がされているが、積極的に運用の指導がなされていない。

参考文献

- 木下是雄（1981）『理科系の作文技術』中央公論社
- 市川保子（2000）『続・日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 比毛博（1989）「接続詞の記述的な研究」『ことばの科学2』言語学研究会編 むぎ書房
- ひけひろし（1987）『『それで』『だから』『したがって』』『教育国語88』むぎ書房
- 細川英雄（2002）「総合的な言語活動とその学習」『多文化共生時代の日本語教育』縫部義憲編 瀝瀝社
- 岡本真一郎・多門靖容（1998）「談話におけるダカラの諸用法」『日本語教育98号』
- 佐久間まゆみ（2002）「接続詞・指示詞と文連鎖」『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
- 佐久間まゆみ（1992）「接続表現の文脈展開機能」日本女子大学文学部紀要41
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 森田良行（1987）「文の接続と接続語」『日本語学』9月号 Vol.6 明治書院
- 奥田靖男（1986）「条件付けを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって」『教育国語87号』むぎ書房
- 門脇薫（1999）「初級における作文指導—談話展開を考慮した作文教材の試み—」『日本語教育102号』

参考テキスト

- C & P 日本語教育・教材研究会編（1988）『日本語作文Ⅰ—身近なトピックによる表現練習—』専門教育出版
- スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
- 土岐哲・関正昭・平高史也・新内康子・鶴尾能子著（1995）『日本語中級J301—基礎から中級へ—』スリーエーネットワーク
- 門脇薫 西馬薫（1999）『みんなの日本語初級・やさしい作文』スリーエーネットワーク
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター（1999）『初級日本語作文練習帳』凡人社
- 田口雅子（1995）『らくらく日本語ライティング（初級後半～中級）』アルク
- 二通信子・佐藤不二子（2000）『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会（2002）『大学・大学院留学生の日本語』アルク
- 倉八順子（2000）『日本語の作文技術 中上級』古今書院
- 文化外国語専門学校日本語課程（1987）『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』凡人社